

猛烈な攻撃だった。丸一日、準備の時があつたし、九天玄女の部下だという時遷から、事前に攻撃の報せを受けていたので、大きく崩されることはなかったが、それでも勢いを止めるのが精一杯だった。

「こりや、大変だな。禁軍の奴等、半端な意気込みじゃねえ」

陳達は、思わず呟いていた。

夜明けとともに、攻撃が始まった。夜のうちに移動したようだが、その動きは時遷の配下によって細大漏らさず報告されていた。陳達は夜明け前から隊伍を整えていた。それでも踏み止まるのがやっとだった。

「奴等、別もののような意気込みですな」

腹心の董超が言った。銅提山の頃からの仲間で、目立たないがよく気の付く男だった。四十を過ぎていて陳達より年上だったが、上に立つより一段下で策を立てるのが気に入っているようだった。部下思いで、若い兵からの信頼も篤かった。

「やはり、都監を殺されたのが効いているようだな」

陳達は答えた。

「頭領、このままではうまく二の木戸へ誘い込めません。何か手を考えませんか」

「分かっている。だが、下手に退こうとすればこちらが全滅だ。それに前しか見えていないから、畏にも気付きやすい」

「注意を逸らせればいいのですが」

「そこだ。だが、あの若者達を頼るわけにはいかん。」

陳達は、聞起と陳統に五十人ずつの兵を割こうと言った。五十人いれば、少なくとも二人に命の危険はないだろう。そう考えたのだった。よほどの無茶をしない限りではあったが。だが、二人はあっさりそれを断った。十人ずつでいい。そう言ったのだった。それも、武に長けた兵ではなく、騎乗に慣れた兵を選んでいった。

「十人ずつしかいない。出来ることは限られている。それにな董超、俺はあの若者達を死なせたくないんだ。いい若者達じゃないか。これからの世を、あんな若者達が生きていくことを考えると、何だか希望が湧いてくるじゃないか。」

「その通りですな。心が晴れやかになるような、そんな若者達ですな。」
「俺はな、李達の兄貴に呼ばれた時から、俺達が盾にならなきゃならないと思っていたんだ。聞起と立ち合ってから、なおさらそう思った。俺は死んでもいい。ただ、蘇源のように意味のある死がほしい。」
「頭領も同じですか。私ははなから命を捨てています。李達の兄貴が救援を請う。それはよほどのことです。私は、これは死んでくれと言っているのだなと思いました。そして、私は嬉しく思ったのです。私は李達の兄貴に命を貰った男です。今こそ、それを返す時だと思っています。」

董超の目は、澄んで穏やかだった。

「おまえはそうか、渭州ゑいしゅうの牢に入れられていたんだったな」

「李達の兄貴が、銅提山の仲間を連れて渭州の牢営を襲った時に、私も助け出されたのです。あの時は頭領もおられました」

「そうだったか。何で牢に入れられてたんだ」

「納めた税を、役人に横取りされたんです。他の役人が税の徴収に来たので分かったのです。税は納めた。どれだけ言っても通りませんでした。横取りした役人の名を出すと、店から闇塩やみしほ※が見付かったと言われて牢に入れられたんです。闇塩は、その役人が店に仕掛けたんです。絹織物を商いしていた店は没収され、私は塩賊しほぞく※として牢生活です。塩賊ですから、もちろん死刑以外に道はありません。そんな絶望の中で、牢営が襲われたのです」

※闇塩 正規のルートを通らない塩。

古くから塩は国の専売で、厳しい管理の下に置かれていた。

※塩賊 闇塩を取引する地下組織または個人。

「そうだ、あの時は捕らえられた仲間を助け出すために襲ったんだ」
「そのどさくさに紛れて、私は脱獄出来たのです」

「李達の兄貴は、片っ端から錠を壊していたからな」

「あの時は、十数人の者が助け出されました。その者達のほとんどは、そのまま逃走しましたが、私は仲間にさせてもらったのです」

「どうして」

「怒りでしょうか。こんな不正は許せない。そう思った記憶はありません。それに、李達の兄貴に言われた言葉。あれで心が決まったのだと思います」

「兄貴は何て言ったんだい」

「人として生きるか。そう問われました」

「人として生きる。兄貴らしいな」

「人として生きる。それは、人として死ぬ。そういうことだと思いません。ですから、今が人としての証あかしをたてる時なのです」

「そうか、俺におまえ達のことを考えるな、と言ってるんだな」

「その通りです。他の皆も私と同じです」

「分かった。これで俺も、思い切った戦が出来る。礼を言う」

「存分に戦ってください。私達はどこまでもついてゆきます」

「それにしても、董超。何で今になって、そんなことを話してくれたんだ。俺は今まで聞いてなかった」

「その時が来た。そう思えたからです」

死ぬ気だな。陳達はそう感じた。仕方ない。俺も一緒に散ってやるぜ。陳達はそう心に決めた。

•••

「黄玉、痛くない」

雪華が黄玉に訊いた。

「大丈夫です。今すぐにでも起きだしたい気分です」

「迷惑をかけたわね。取り返しがつかないほど」

雪華の目には、うっすらと涙が滲にじんでいた。

「姉様、気にしないでください。たかが薄皮一枚のことです」

「でも、女にとってそれは大切なことなのよ」

「姉様の方が、傷は深い」

「わたしは自業自得だもの。それに、女としてなんて考えてないし」
黄玉が笑ったようだった。

「わたしも姉様と同じです。時々、女であることに憎しみを感じます」
「黄玉は小さい時からそう言ってたものね。男だったらよかったのにつて」

「男だったら、わたしはもっと強くなれたろうし、女ゆえの嘲りを受けることもなかった。そう思う時がありました」

「わたしと違って、あなたは争いの矢面に立つことが多かったものね」

「それは気にしてません。それが、わたしに出来る唯一の仕事でしたから」

「聞起も言ってたわ。揉め事が起きたら、いつも黄玉に頼ってたつて。だから、自分も強くなって黄玉の負担を減らしたいんだつて。交易には揉め事がつきものだから。それに、あなたは街道の賊も撃退してくれていたし。曹瑛も感謝していたの。黄玉が賊を抑えているから、荷の心配をしなくて済むつて」

「そんなこと……」

「あなたには、辛い仕事を押し付けてしまったわ。こんなに綺麗な娘なのに、争いの中にばかり置いてしまった。それに何の文句も言わない。わたしは、あなたや曹瑛に甘えていたのね」

「わたしは、わたしがしたくてそうしていたのです。押し付けられたとか、嫌々やらされていたのではありません」

「今度のこともそう。わたしの不始末のために、こんなにも多くの人を死なせてしまった」

「曹瑛から聞いたのですね」

「わたしが死んでいれば、こんなに人が死ぬことはなかったのに」

雪華の嗚咽が聞こえてきた。

「姉様のせいではありません。誰であろうと、あんな非道を見過ごす

わけにはいきません」

「でも、わたしのせいで死なせたとしか思えないわ」

「姉様。もしもわたしや曹瑛が、姉様と同じ目に遭ったとしたら、姉様はどうします。わたし達と同じこと、いや姉様のことだから、わたし達以上のことをしたのではありませんか。蘇源殿は、李達様のために命を投げ出した。いえ、もしかすると自分自身のためかもしれない、と李達様は言っておられました。曹瑛を助けた蒋唐様は、姉様に会ったこともないではありませんか。蒋唐様は、曹瑛のために命を捧げたのです。それは皆同じです。姉様のため以上に自分のため、いや自分の信念のために戦ったのです」

雪華は反論しなかった。

「曹瑛とも話しました。たとえこんなことが起こらなくても、わたし達はいつか、この国とぶつかることになるだろうと」

「いつから」

「一歳ほど前から。聞起もそう思っています。深く話し合ったわけではありませんが。おそらく、陳統も」

「皆なのね」

「わたし達が、宋家村のために何かをする。いえ、宋家村だけでなく、民の苦痛を少しでも和らげたい。そのために何かをする。それが宋という国にとっては邪魔なのだ。そう曹瑛と話し合っていたのです」

「そうだったの。わたしは知らなかったわ」

「姉様は、責任ある立場です。こんな話は、責任のないわたし達だけのことです」

「黄玉、それは違うわ。責任があるからこそ、考えなくてはならないの。人のありかた、村のありかた、そして国のありかた。違うようっていて、その大本は同じはず。そこから逃げてはいけないの」

「姉様なら、わたし達の気持ちを分かってくれると思っていました。この国に蔓延する不正や非道。わたしはふだん遼にいたので、よけいに感じられるのです。姉様に会うために宋に足を踏み入れた途端、耐え難いほどの腐臭を感じるのです」

「遼は、宋ほど腐ってはいないのね」

「もちろん、遼でも賄賂はありますし、役人は民から搾取しようとしています。ですが、宋のそれとはくらべものになりません。腐りかけているのと腐り果てている、それぐらいの差があります」

「遼はまだ立ち直れると」

「上に立つ者が気付き、本当に革めればですが」

「黄玉はそんなに宋が嫌いだったのね」

「この国の空気が」

二人は少しの間、口を閉ざしていた。

雪華がぼつりと言った。

「李達も同じようなことを言っていたわ。この国は腐っている。天子なんかいらなんて」

「稽古をつけてくださった後、よくわたしや曹瑛に話してくれていました。聞起や陳統にも」

雪華はむくれたようだった。

「わたしにはそんなこと話さなかったわ。わたしが馬鹿だと思っていたのかしら」

黄玉は、少し笑いながら言った。

「雪華姉様はもう分かっている。そう言っておられました」

「そうかしら」

「分かっておられる。わたしもそう思います」

雪華はそれ以上訊かなかった。

「黄玉、ごめんね。本当は戦いたかったのでしょう。わたしのせいで、身体に傷まで負わせて」

「傷はそれほど大きくないのです。公孫勝様が銅鏡で見せてくださいました。切り取った皮に細かい刻みを入れると、案外皮というものは伸びるのだそうです。絹糸で綺麗に縫い合わせてくれました。皮も、痕が残り難い方向に切り取ったと言っておられました。六日もすれば糸を抜き、十日で普通に動けると言っていました」

「でも、黄玉の綺麗さが傷付いたようで、わたしは心苦しいの」

「綺麗……。わたしはそんなこと感じたこともありません。銅鏡を覗くことありませんし。そんなもの、わたしには必要ありません」

「そうね。あなたは小さい頃からそうだったものね。でも、わざと撰せんなうことは駄目。柴さい小母せうぼさんが悲しむわ。お父様とお母様から貰もらったものなのよ。粗末にしては駄目」

「はい。姉様がそう言うのなら」

「わたしは、普通の娘のように生きるのは諦めていたの。父を殺され、村を蹂躪しごされ、わたしは人を殺した。助かるためとはいえ、わたしは自分の意思で殺したの。あなたも憶えているでしょう。あんなに嫌っていた武術が、わたし達を助けたの。わたしは人を殺した。だから人に殺されても仕方がない。その覚悟がついたの。そんなわたしが、普通に嫁いで、普通に子を産み育てる。そんなことは有り得ないの。だから、皮を焼かれ、乳首を失ってもそれほど悲しくはないの。子に乳を与えられない。それを夢見ている娘にとっては、死ぬほど辛いことだと思うけど、わたしにはそんな夢などなかったから」

「そうなのですか。わたしも子を産むつもりはありませんが」

「あなたは子を産むの。わたしとは違うのだから」

「人を殺したと言うのなら、姉様よりわたしの方が何十倍も殺しています」

「ええ……。ごめんね黄玉」

「曹瑛も今度のことで、わたしと同じほど殺していると思います」

雪華は、上掛うわがけで顔を隠した。

「曹瑛にも、本当に済まないことをしたわ。聞起きおにも、皆にも」

「皆、自分の意思でしたことです。後悔している者はいません」

「でも……」

「悔やまないでください。石は転ころがり始めたのです。姉様らしく、わたし達に命じてください。腐った者達を片付けろと。新しい、濁りのない風で、民の国を清めよと」

雪華は、上掛うわがけを顔から除はずけた。

「そうね。あなたの言う通りかもしれない。過ぎたことを悔やんでい

るだけでは、前に進むことは出来ない。命を落とした人達を忘れなければいい。心の中にずっとしまっておけば、いつか話しかけてくれるかもしれないものね。分かったわ、黄玉。時はかかるかもしれないけれど、わたしは前を向いて歩き出すことにするわ。何より、罪のない人達に、わたしと同じような思いをさせたくないわ」

「姉様らしくなってきました」

「それはそうと黄玉」

「何でしょうか」

「あなた、どうしてこの部屋に運ばれて来る時に、公孫勝様を呼んだの」

黄玉が顔を赤らめた。

「いいのよ、黄玉。あなたにそんなところがあったなんて、とっても嬉しいわ。初めてだもの、あなたのある姿を見たのは」

黄玉は反対側を向いて、何も答えなかった。

「公孫勝様は、立派な方だと思わ。ちよつと歳は離れているけど、あなたが好きになるのはよく分かる」

黄玉が小さく呟いた。

「あの方は、わたしのような小娘を、相手にはしてくれない……」

「そんなこと……」

そう言いかけて、雪華は言葉を詰まらせた。公孫勝は、どこか男と女の、心の機微（はな）から外（はず）れたところにいる。そんなふうに感じられるところがあつた。歳のせいとか、考え方のせいとか、そんなことではなく、何か諦観（あきら）のようなものが感じられた。どんなに近くにいても、どこか遠く（とほ）くにいるような、そんな優しい哀しさのようなものを感じるのだった。黄玉、あなたの気持ちに通じればいいね。大丈夫、あなたなら出来る。こんなに綺麗なのだから。心も容貌（かたち）もね。雪華は、そう心の中で励ました。

•
•
•

禁軍騎兵隊が五段の陣形をとって、ひたひたと圧力をかけてきた。一の木戸の前方は広いとはいえ、横に広がれるのは五十騎程度だった。禁軍騎兵隊の四分の一しか前面には出ていない。その後ろには、立錐の余地もないほど歩兵が犇めき合っている。木戸から麓にかけては、曲折した細い山道になっているので、歩兵の列がどこまで続いているのかは、一の木戸からは確認出来なかった。ただ、その気迫から見て、おそらく歩兵の大部分が投入されているものと思われた。

「頭領、三の木戸からの伝令では、ここが勝負ということですよ」

董超が言った。

「分かっている。この状況を見りゃあ、ここが正念場ってことは分かるさ」

陳達は真剣な顔で答えた。

「どうします」

「これだけ数の差があれば、まともにぶつかるなんてことは出来ねえ。李達の兄貴がよく言うように、頭を獲らなきゃどうしようもねえ。だがな、その頭が見えないんだ」

「頭というと、経略使の杜愔ですな」

「そうだ、俺は奴の顔を知ってるんだ。居場所さえ分かれば、そいつだけに突っ込めるんだが」

「無理、でしような。騎馬隊の指揮官は、都監の一人の鳳潤です。なかなか優秀な將軍で、杜愔の信頼が篤い。おそらく、奴がこの攻撃の責任者でしょう。こうした戦で、経略使が前面に出て来ることはありませぬ」

「それもそうだな。禁軍が出て来ること自体、普通なら考えられんことだからな」

「では、鳳潤を狙いますか」

「それしかなさそうだな。俺が鳳潤に当たる。おまえ達は、邪魔させないようにしてくれ」

「というと、錐鉤の陣※で」

※錐鉤の陣 敵に対し、きりのように尖った先端で陣を割る、

「陣を作れるほどの人数ではないけどな」

「分かりました。頭領、犬死いぬじなされませぬように」

「死は覚悟してるけどな。犬死はごめんだ」

董超が笑ったようだった。

「行くぞ」

百八十人全員が駆け出した。そのうち騎馬は、陳達を含め五十に満たなかった。騎馬がぶつかった。陳達は最初にぶつかった騎馬兵の腹を刺した。そのまま、高々と兵の身体を頭上に跳ね上げた。すぐ後ろの騎馬兵が、息を吞んで後退した。隣では董超が、騎馬兵の肩に槍をたてていた。陳達の兵は果敢に攻め込んだ。禁軍騎馬隊は、ややもすると崩されそうな状況だった。数は多い。だが、動ける余地が限られているので、常に五十ほどしか前面で戦えないのだった。

意気込みが違う。横から繰り出された槍をいなしながら、陳達は思った。おまえ達、やるじゃないか。そう、誇りにも思った。董超が、また一人騎馬兵を馬の下に突き落としている。陳達が貫いた騎馬兵は、六人になる。後ろの方でも、やったぜという声がいくつも上がっていた。三十人近くの騎馬兵を討ち取ったようだった。

「何をやっておる」

騎馬隊の一番奥から怒号が聞こえてきた。「一際ひととき派手な鎧兜よろいの男が、槍を振り回して騎馬兵を鼓舞むげんしていた。

「あいつだ」

陳達が董超に叫んだ。董超の顔は、返り血で朱に染まっていた。

「頭領、ここは私達に任せて……」

言った董超の横を、騎馬兵の槍が襲った。ほんの一瞬、陳達の鉄管鎗てつかんせうの方が早かった。騎馬兵は、脇腹をおさえて馬からずり落ちた。

「頭領、助かりました」

「まだ死なれちゃ困る」

陳達はそう言って、指揮官に向けて馬を走らせた。

指揮官が間近に見えてきた。騎馬兵が二人、陳達の行く手を遮った。

大斧を振り上げて、馬ごと陳達を両断しようとしていた。

大斧の風圧を左にかわして、右の騎馬兵に鉄管鎗を繰り出した。穂先は、狙い違わず騎馬兵の鎧の継ぎ目に滑り込んだ。絶叫を上げて、騎馬兵が身体を反らした。左の騎馬兵が、長槍を突き出した。かなりの速さだった。陳達は、かわすのは無理だと感じた。騎馬兵を串刺しにしたまま、陳達は鉄管鎗を左に振った。騎馬兵の長槍が、串刺しにされた騎馬兵を貫いた。陳達は、力の限り鉄管鎗を前に突き出した。騎馬兵は長槍を抜こうと引いたが、そこを陳達に利用された。鉄管鎗の穂先が、長槍の騎馬兵の喉を貫いた。がふっという声を上げて、騎馬兵が仰向けに馬から落ちた。陳達は、串刺した騎馬兵の身体を鉄管鎗からはずすと、一気に指揮官との距離を縮めた。董超と十数人の兵が、指揮官を護ろうとする騎馬兵を食い止めていた。

「禁軍兵馬都監と見た」

陳達が言った。

「都監の鳳潤だ」

鳳潤は冷静に答えた。見事な落ち着きぶりだった。

「おまえは」

「もと銅提山黒旋風隊騎兵隊長、跳澗虎陳達。一対一の勝負を願う」

鳳潤は、失笑して答えた。

「片腹痛いわ。おまえ等ごとき山賊風情が、この儂と勝負だと」

鳳潤が大刀※を一振りした。のけぞりそうな風圧が、周囲の喧騒を両断した。※大刀 薙刀に似る。

「頭領……」

騎馬兵の手首を刺した董超が、不安げに陳達を振り返った。

「腐っても禁軍か。相手に不足はねえ」

陳達の身体から、炎のような闘気がたちのぼった。

その気に打たれてか、周囲の兵達は争いを止めた。禁軍歩兵も馬を避け、二十歩近く後退していた。

「いくぞ、山賊」

鳳潤が馬を走らせた。

「きやがれ」

陳達も馬を駆った。

二呼吸もせず馬は交差した。鳳潤の大刀は空を斬り、陳達の鎗も届かなかった。二人は馬首を返し、再び武器を振り上げた。ぶつかった。大刀が唸りを上げて左脇を襲った。鉄管鎗がそれを柄で受けた。重い金属音が響いた。鳳潤の目が、驚いたように見開かれた。柔な木の柄なら、斬れるか折れるかしていたはずだった。だが、鉄管の柄はびくともしない。陳達の鎗が神速で繰り出された。穂先は鳳潤の右腿を刺したが、深くはなかった。大刀が振り下ろされた。凄まじい風圧だった。からくもかわしたが、左腕の外側を微かに掠った。二人は構えを直した。

「なかなかやりおるな」

鳳潤が言い、大きく肩で息をした。

「さすが禁軍將軍だ」

陳達も息を整えた。

また、ぶつかった。馬を交差させず、並んで三四合撃ち合った。大刀の力、鉄管鎗の速さ。優劣はつき難かった。右、左、大刀が陳達を襲った。ことごとくかわしながら、鉄管鎗が鳳潤の上下を突いた。鎗の動きは速いが、鳳潤は巧みに柄で払っていた。暫く撃ち合った。鳳潤の息が荒くなってきた。若さの差。それが効いてきた。鳳潤が馬を退いた。

陳達は汗こそ滲ませていたが、息は上がっていなかった。今だ。陳達は思った。

「跳潤虎と呼ばれる由縁、見せてやる」

陳達は両足を鞍の上に乘せた。しゃがんだ格好で、そのまま馬を走らせた。鳳潤は、中段に大刀を構えた。

二馬身手前で、陳達の姿が消えた。鳳潤は頭上を見上げた。黒い影が上から降ってきた。眩しい。陽の光から目を逸らした。左肩に衝撃が走った。

「獲った」

陳達の叫びだった。

左肩に鉄管鎗を立てて、鳳潤の身体がゆっくりと馬上から崩れ落ちた。

敵も味方も、誰一人言葉を発しなかった。陳達が鉄管鎗を抜いた。

「頭領、見事」

董超の声だった。

呪縛が解けたように、禁軍騎兵隊が押し寄せた。一呼吸置いて、禁軍歩兵本隊も前進を開始した。騎兵は都虞候が、歩兵は都監が指揮を執っていた。

突然、広場の左右の木立から、疾風のように馬が駆け出して来た。その後ろから、それぞれ十騎ほどが飛び出して来た。

一騎が禁軍騎兵隊の前を遮った。もう一騎は歩兵本隊の中に突っ込んだ。

「止めろ」

騎兵隊都虞候が叫んだ。

その叫びが終わるやいなや、目にも止まらぬ速さで何かが飛んで来た。

「ぐはっ」

騎兵隊都虞候が、勢いよく馬から転がり落ちた。

「聞起」

聞起は、なおも流星錘を飛ばしていた。縄の両端の錘を、二つとも使っていた。大勢を相手にする時は、錘を両方使う。それは、阿骨打から教えられたことだった。

「陳達小父さん。恰好よかったよ」

聞起が陳達に言った。錘に顔面を砕かれた騎兵が、次々と馬から転げ落ちた。

「聞起、おまえもな。まったく、いいところに来たぜ」

陳達が鉄管鎗を高々と頭上に上げた。

「おまえ達、今だ。一気に押し捲れ」

董超に率いられ、東汾山の兵達が数に勝る禁軍騎兵隊を押し込

だ。

禁軍歩兵本隊は、大混乱に陥っていた。陳統を乗せた弦月が、縦横無尽に歩兵の中を飛び跳ねていた。弦月は、着地の度に兵士の頭を踏んで碎いていた。陳統の鉄扇に仕留められた歩兵も、二十を超えるまでになっていた。後から来た二十ほどの兵は、全員陳統に続いて歩兵隊の中に突っ込んだ。歩兵は右往左往し、都監の指示も全く届かないありさまだった。

聞起が董超を追い越し、東汾山兵の先頭に立った。遮ろうとした禁軍騎兵は、ことごとく聞起の飛ばす流星錘で顔を潰された。

騎兵の最後尾が一の木戸に達するのは、あと僅かだった。

「押せ、もうすぐだ」

陳達が、後ろの方から声を上げた。自分は、禁軍歩兵隊の動きを封じるために、東汾兵の殿軍を務めるつもりだった。

聞起の流星錘に押し込まれ、禁軍騎兵隊は一の木戸の大門に突き当たった。誰かが、大門を開いた。どうして大門に門がかかけられていないのか、混乱の中では、考えが及ばないようだった。

聞起が凄まじい勢いで、禁軍騎兵隊に突っ込んだ。朧月が一声大きく叫びた。聞起の流星錘が、唸りを上げて騎兵隊を襲った。

逃れるように、騎兵の二三騎が一の木戸の大門を潜った。後は、雪崩のように騎兵隊が大門の中に入った。都監と都虞候、その両方を失った禁軍騎兵隊は、半ば戦闘意欲を喪失していた。

「何だ、これは」

騎兵が発した声は、すぐに絶叫に変わった。

騎兵が次々と、一の木戸の裏に掘られた空濠に落ちていった。

「董超さん。後は頼みます」

聞起はそう言って、馬首を返した。半里を瞬く間に引き返した。

歩兵隊の中を、舞うように飛び跳ねている弦月が見えた。

「さすがに弦月だ。こういうことは俺でも出来ない」

その言葉が不満だったのか、朧月が大きく首を振った。自分も出来る。そう言っているようだった。

「朧月、おまえなら出来るさ。ただ、こうした曲乗りは陳統の右に出る者はいない」

聞起は陳達の隣につけた。

「俺と陳統が、歩兵を分断します。それを、一の木戸に追い込んでください」

「おまえといい、陳統といい、とんでもない若武者だ」

陳達は心底感心しているようだった。

「黄玉はもっと凄いですよ」

「あの、寝込んでいた超別嬪さんか。李達の兄貴も、素晴らしい弟子を育てなすったもんだ」

弟子、というところで聞起の心が痛んだ。

聞起を乗せた朧月が、待ちかねたように禁軍歩兵の中に飛び込んだ。

「陳統、歩兵を一の木戸に」

聞起の叫びに、陳統が肯いた。

「何人」

「五百ほど」

陳統がさらに歩兵隊の奥に突っ込んだ。二十人の東汾山兵は、まだ一人も欠けてないようだった。馬の動きが速く、歩兵の槍が届くようなものではなかった。

陳統の二十に聞起が加わり、禁軍歩兵隊は大混乱に陥った。押されるように、五百ほどの塊かたまりが本隊から外はずれて来た。ここぞとばかりに陳達と董超の兵達が一の木戸に押し込む。

歩兵達が一の木戸に達した。陳達が号令を発して、歩兵の背後を襲う。歩兵達が次々と空濠の中に転落していった。聞起と陳統に阻まれて、残りの歩兵本隊は、なす術すべもなくそれを見ているだけだった。

先に落ちた騎兵隊を、李達と曹瑛が素早く討ち取っているのが見えた。

「勝った。緒戦は貫った」

陳達は、満足そうににやりと笑った。

・
・
・

陳達が、禁軍都監に一騎討ちを仕掛けていているのが見えた。

「曹瑛、そろそろ来るぞ」

李逵は、隣で短弓を構えている曹瑛に言った。

「はい、準備は整っています」

「この勝負がついた時が、聞起と陳統の出番だ」

李逵がこともなげに言った。曹瑛は不思議に思った。

「李逵様。もし、陳達様が敗れた時は」

「そんなことは考えておらん」

李逵が即座に答えた。そして、言葉をつないだ。

「陳達とは長い付き合いになる。陳達を信じられなくて、この策を立てることは出来ん」

「そうですか。わたしも信じてはいるのですが」

「心配するのは分かる。だが、陳達は特別な技を持つておる。跳澗虎にしか出来ん技だがな。二度三度と使える技ではないが、初めて見てかわせる者は、そう多くないだろう。曹瑛、大丈夫だ。それより、馬は射ぬようにな。馬は貴重だ。出来るなら、奪ってこちらで使いたい」

「分かっています」

曹瑛が肯いた。李逵様が信じると言うのだから、わたしも信じよう。曹瑛は心を集中した。

陳達が、大きく馬上で跳び上がるのが見えた。弧を画いて降りた時、禁軍都監は馬の下で横たわっていた。聞起と陳統が左右の林から飛び出すのが見えた。禁軍騎兵隊が崩れたのが分かった。

「全員、攻撃態勢に入れ」

李逵の声が、二の木戸に鳴り響いた。

それほどの時間もなく、騎兵が馬ごと空濠に落ちてきた。曹瑛が三人を射る。後は息つく間もなかった。陳達の兵が、騎兵隊を一の木戸に押し込んだ。押し込まれた騎兵は、面白いように空濠に転げ落ちた。

李逵が空濠の中に飛び降りた。続いて八十人ほどの東汾山兵が飛び

降りる。空濠の中は、阿鼻叫喚の地獄に変わった。鮮血が飛び散り、騎兵が次々と倒れていった。騎兵達は崩れた態勢を立て直す間もなく、李逵や東汾山の兵に殺されていった。

曹瑛は、二十人ばかりの兵と共に、空濠の上から矢を射続けていた。騎兵一人一人の顔は見ないようにしていた。敵兵といっても、家族もあれば友もいるはずだった。兵士一人一人が人生を持っている。それを考えていては矢など射られない。だから見ないようにしていた、考えないようにしていた。もともと、自分達が仕掛けた戦ではなかった。雪華姉さんが罪をきせられる何の理由があるというのか。雪華姉さんを助け出すと、非道にも軍を出して抹殺しようと企んだ。討たれるわけにはいかなかった。雪華姉さんも仲間達も、そんな馬鹿馬鹿しいことのために死んでいいはずがなかった。だから戦う。だから殺す。自分達が殺されたくなければ、そんな非道に手を貸さねばよいのだ。他人に非道を押しつけて、自分達は助かるうなんて、あまりに身勝手過ぎる了見だった。

「李逵様、次が来ます」

曹瑛が大声を上げた。李逵は空濠の中に入っている。一の木戸の向こうを見るのは、曹瑛の役目だった。

「こちらはあらかた片付いた。次が来ても大丈夫だ」

李逵は、傷付いていない馬を、空濠の端から二の木戸に上げさせた。落ちた時に脚を傷めた馬が多かったが、半分ほどは無傷のようだった。馬を扱うことが下手な兵ほど、こういう時に馬を負傷させる。禁軍騎兵隊と大きな顔をしていても、所詮はこの程度か。李逵は舌打ちしたい気持ちになった。

怒号と悲鳴が聞こえてきた。曹瑛が続けざまに矢を放った。李逵は東汾山の兵達に、落ちて来る兵に当たらないように注意を促した。

「来たぞ」

誰かが叫んだ。

頭の上の地面が、一瞬裂けたように感じられた。李逵は空濠の壁に張り付いた。

雪崩のように、歩兵達が切れ目なく落ちてきた。胴から落ちる者、足から落ちる者、様々だったが、さすがに頭から落ちてくる者は少なかった。頭から落ちた者のほとんどは、他の歩兵の巻き添えを喰った者で、落ちると同時に、上からの兵に頭を潰されて絶命していた。

「多いぞ。気を締めてかかれ」

李逵がそう叫んで、二挺斧を舞わせた。忽ち、李逵の周囲が血煙で赤く霞んだ。

「殺さなくていい。肘を狙え。戦えなくすればよいのだ」

李逵自身も、首を飛ばすことは止めていた。鎧の継ぎ目の肘を落としていた。肘から先を失った歩兵は、血止めにおおわらわで、とても反撃するどころではなかった。東汾山の兵達も、李逵に倣ってとどめをさすことを止めた。敵を殺そうとすると、槍だろうと剣だろうと、どうしても深く突かねばならない。それで、抜くのに手間取る。戦闘不能にするだけならば、浅くてもかまわなかった。

「やれ。暫くは戦えないようにしろ」

李逵の声に励まされ、東汾山の漢達は、一斉に数倍の数の歩兵に襲いかかった。曹瑛は間断なく矢を射ていた。

・・・

公孫勝は、腕を組んで戦いの帰趨を読んでいった。陳達、聞起、陳統の三人が、禁軍騎兵隊を空濠に落とし込んだ時、勝ったと心の中で思った。その後で、禁軍歩兵本隊をも罠に押し込んだ。望外の成功だった。せめて禁軍騎兵隊だけでも。策の効果を、公孫勝は最低限そこまではと期待していた。実際に戦闘が始まると、予想を超える大勝利の様相を呈してきた。陳達、聞起、陳統が、公孫勝の計算を、よい意味で裏切った。そう考えるしかなかった。

「大した者達だ。宋家党の若者達も、李逵殿の部下達も」

公孫勝は、心からの賛辞を送っていた。これだけの圧倒的な数の差を、覆すのはこれしかなかった。敵の頭を潰す。その一点に、成否

は委ねられていた。陳達は、勝てると踏んで一対一の勝負を挑んだのだろうか。いや、そんなことはおそらく考えていない。あの男なら、勝てぬと分かっているでも挑んでいただろう。自らを捨てても。

「鮮やかな者達だ」

公孫勝は、声に出して讚えた。そして、自らと、宋雪華達の行く末を思った。

墨翟亡き後、墨家は分裂した。墨翟という類稀な指導者を失った教団は、鄧陵氏、相里氏、相夫氏の三派に分かれ、さらに三氏以外にも墨家の教えを継ぐ者が続出した。そうして千数百年を経て、今、墨家の集団としてあるのが公孫勝の集落だった。かつては、墨家の指導者は鉅子と呼ばれた。だが、今ではそんな呼び方も忘れられている。儒家、そして時の権力者から弾圧された墨者は、次第に地下に潜り、やがて忘れられた存在になっていった。公孫勝の集団も、その出自がどの派に属していたかさえはつきりとしていなかった。確かに兼愛という思想は、自らを天の子と称し、民を隷属させたい権力者にとって、不都合なものだったろう。まして、攻めることには消極的な墨家だったが、守ることに積極的で、そのための様々な兵法や技術を開発していったのだ。権力者にとって煙たいどころか、抹殺したい教団だっただろう。その権力者に取り入り、共に甘い蜜に群がっていた儒家にとってみても、目障りな存在だったことは間違いない。そうして墨家は滅び、儒家は栄えた。民に立つ墨家は、覇者に立つ儒家に敗れたのだ。もちろん、儒家の中にも民に立つ儒者もいたことだろう。墨家の中にも権力者に擦り寄る者もいただろう。しかし、大きな流れで見ると、墨家は儒家に滅ぼされたのだった。

それがいいことだったのか、悪いことだったのか、公孫勝には分らなかった。ただ、儒家に比べて、墨家は自らの存続に対しての意識が足りなかった。そう思っていた。分裂などせず、民と共に立ち上がればよかった。結局、墨翟に代わって権力を持ちたい、その想いが分裂を生んだのではなかったか。ただでさえ数の少ない者達が、分裂でさらに少なくなっていく。儒家にとっては、笑いの止まらぬことだっ

たろう。墨家は自ら滅んだのだ。儒家や覇者によるものではなく、自らが滅びの道を選んだのだ。

「このままでよいのか」

公孫勝は、思い悩んでいた。

宋雪華を知り、宋家党と世に謳われている若者達と出会った。そして、以前から知っていた黒旋風。この者達の生き様に、公孫勝は少なからぬ衝撃を受けていた。ひたむきなのだ。賊に村を襲われたのが、三歳前だった。九天玄女は、その前から宋家村に時遷とその部下達を送り込んでいたようだったが、その事件以後、頻繁に消息を調べていたようだった。公孫勝も、菓草採りに出向く度に宋家村の話聞かされた。それで、宋雪華にも、宋家党の若者達にも親近感を抱いていた。まして知り合いの李達まで宋家村に入ったのだった。それからの奇跡の復興。話でしか聞いていなかったが、その復興の早さには驚くべきものがあつた。賊に襲われ、壊滅的な打撃を受けた村の運命は、おおよそ二つの道を辿るのみと言えた。村を捨て逃散するか、長い歳月をかけて立て直すか、そのどちらかだった。宋家村はそのどちらでもなかった。たった一歳で立て直し、その翌年には前以上の繁栄を手に入っていたのだった。村の敵である遼との交易、さらには西夏との交易、それらが大きな繁栄を齎した。公孫勝はそう考えていた。敵とも言える遼との交易。言うは易く、行うは難いことだった。宋雪華は、それを軽々と乗り越えていた。しかも、遼そのものに膝を屈してではなく、あくまでも遼の民との交易だった。村を襲った遼兵は許さない。だが、共に生きる遼の民とは友好を結ぶ。宋雪華の交易相手を見てみると、見事なほど遼の宮廷や軍を排除していた。そして利を貪らないから、交易相手や民の求めやすい値になる。物は人の手を経るほどに値が上がる。宋雪華は、そのことを熟知している。出来るだけ簡素な流通の仕組みを作り上げ、本当に必要としているところに、必要な量だけ物を移す。それを徹底的に組織化していた。物の集散の管理には曹瑛が、情報の収集と伝達には聞起と陳統が、移送の安全には黄玉が、それぞれ中心的な働きをしていたのだろう。宋家村の奇跡の復興は、一人宋

雪華の力だけではないのだ。もちろん、宋雪華という核があつてこそではあるが、宋雪華を中心にした綺羅星（きらほし）のような人材がいて、初めて奇跡の復興が為（な）されたのだった。それが、今度の戦でよく見えてきたことだった。

公孫勝は、禁軍歩兵の生き残りが、仲間の死体を担いで戻るのは見詰めていた。さすがは李逵だった。全員は殺さないで、仲間の死体を持ち帰らせる。敵に憎悪を植え付けないと共に、死体処理の面倒も軽くする。実際、敵の死体を放置すれば、明日には大変な臭気を放つことだろう。死は醜い。公孫勝はそう思つてきた。死は総ての者を、等しく醜い物に変えてしまう。腐敗し、耐え難い腐臭を放ち、獣や蟲（むし）に食され、やがては骨に成り下がる。公孫勝は、嫌と言うほどそれを見続けてきた。生きていた時にはどんなに美しくとも、死という関所を越えた途端それは喪われ、後はただ、誰であつても同じ、醜い変遷を迎えるだけだった。公孫勝が医術を志したのも、そんな醜い死に対しての、復讐（ふしう）なのかもしれない。命とは醜いものなのか。生とは死を迎えるための待ち時間ではないのか。公孫勝は、何度も命に対する失望を感じていた。だが、この若者達はそんな公孫勝の心に、微かな希望の灯を点（とも）してくれた。命は捨てたものではない。公孫勝は、生まれたての赤子（あかこ）の泣き声を思い出していた。何も描かれていないまつさらの心を持つて、この混沌とした世に生れ落ちた不安、恐怖、そして喜び。それら総てを躡（お）す赤子の泣き声。公孫勝は、何故かその泣き声を聞く思いだった。宋雪華の言葉に、黄玉の決意に、曹瑛の優しさに、聞起の勇氣に、陳統の陽気さに、石勇の真面目さに、公孫勝は限りない美しさを感じるのだった。仁。今それが生まれようとしている。人を慈（あや）しむ心。それこそが、宋家党を美しく見せている根源だった。この若者達を潰してはならない。そしてこの若者達こそ、墨家の教えそのものの生き方をしてはいないか。純粹でひたむきな墨子様の教えを。

李逵を先頭に、曹瑛達が引き揚げて来るのが見えた。一の木戸の向こうの陳達や聞起も、禁軍が退くのを確認して戻る途中だった。

自分達は何をしていた。公孫勝は自責の念に駆られた。名ばかりの墨家の末裔として、ただ生き永らえていただけではなかったか。墨子様は民に兼愛非攻を説き、自ら民の命を守るために守城の方法を編み出したのではなかったか。守るための力。そのための武を、弟子達に研鑽けんけんさせたのではなかったか。一人で千の兵に勝まさる。墨家創立当初の、それが権力者を震え上がらせたのではなかったか。

「私は長く生き、多くのことを学んだつもりになっていた。だが、それは間違いだった。宋家党の若者達よ。おまえ達に感謝する。私は、今初めて目が開いたような気がする」

公孫勝は、一人三の木戸から飛び降りた。

李逵と曹瑛が笑顔で手を振っていた。

捕獲した馬を東汾山の兵達が集めていた。

陳達と聞起と陳統が、三人仲よく語り合っていた。

あれほど輝いていた陽の光が、厚い雲に隠されつつあった。

「雨になりそうだ」

公孫勝はそう呟いた。空よりも早く、公孫勝の心には喜びの涙が降り続いていた。